

# 琉球大学学術リポジトリ

## 児童の社会性の発達に関する一研究： 社会性CAMI尺度と自己制御行動との関係

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2007-09-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 島袋, 恒男, 大城, 琴恵, Shimabukuro, Tsuneo, Oshiro, Kotoe メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/1933">http://hdl.handle.net/20.500.12000/1933</a>

# 児童の社会性の発達に関する一研究 —社会性CAMI尺度と自己制御行動との関係—

島袋恒男<sup>1)</sup>・大城琴恵<sup>2)</sup>

A Study on Development of Sociality in Middle Children  
—A Construction of Social CAMI Scale and Self-Regulated Behavior—

Tsuneo SHIMABUKURO Kotoe OSHIRO

## 1. 研究目的

CAMIとは、目標達成への統制感 (Control beliefs)、そのための手段保有感 (Agency beliefs)、そして手段保有感の獲得を支える手段—目的関係の一般的認識 (Means—ends beliefs) の頭文字に Interview の I を加えたものである。目標達成への統制感はある特定の目標を達成できるという意欲・自信の程度に関係しており、手段の認識と手段保有感は、一般的に他者はある目標を達成するものとしてどのような手段を行使しているかという認識のことであり、それを受けて、自分にはどのような手段が備わっているかという理解が手段保有感に相当する。

Skinnerら (1988) は、達成への統制感、手段保有感及び手段の一般的認識の3項関係の在り方が行動をより正確に予測しうるものとして、児童の学習領域でのCAMI尺度を開発している。CAMIを用いた研究は主に学業達成との関連で我が国でも実施されてきている (唐沢・東・宮下, 1993; 島袋ら, 1995)。

本研究は、児童の社会性の発達や社会的行動の達成への問題をこのCAMI理論に基づいて検討しようとするものである。果たして社会性CAMIは社会性の発達や社会的行動の達成をどの程度説明可能であろうか。

さて、児童中期はギャング・エイジ期と呼ばれ仲間関係での活動が活発になる発達期である。この時期の児童は特定の小人数の仲間の中で、約束や規範を共有し、それを基準として社会的・対人の行動を学習していくものと考えられている。そ

して、その結果として「われわれ意識」を強く形成し、自己中心的な行動から、次第に約束や規範、あるいは「役割取得」に代表されるような他者を念頭においた社会的行動が学習され、その結果として児童の社会性が発達していくことが予測される。

ところで、柏木 (1988) は幼児期における社会性の発達を自己制御行動の発達として把握している。自己制御行動とは、「自分の欲求や意志を明確に持ち、これを他人や集団の前で表現し主張する、または行動として実現する」自己主張・実現と、「集団場面で自分の欲求や行動を抑制・制止しなければならない時、それを抑制する」自己抑制の2側面から理解されると考えられている。そして、因子分析の結果、自己主張・実現の下位尺度として、「遊びへの参加」、「独自性・能動性」、「拒否・強い自己主張」を、自己抑制の下位尺度として、「遅延可能」、「制止・ルールへの従順」、「フラストレーション耐性」、「持続的対処・根気」の次元を確認している。そして、自己主張・実現と自己抑制の両側面とも年齢の増加にともない、上昇・発達の傾向をたどること、特に自己抑制の上昇・発達が著しいこと、などが確認されている。このような結果から、子ども達は一方的に自己主張・実現を果たし、また一方的に自己抑制させられている訳ではないことがうかがい知れる。そこには絶えず他者や大人との相互作用があり、その中で自己主張・実現を図り、時には他者の立場や社会的規範を理解し、自己抑制を実行していく姿を見ることが出来る。

さて、他者との関係や集団の中で自己主張・実

1) 学校教育講座 2) 教育学部非常勤講師 (教育心理学, カウンセリング)

現を達成し、時には社会規範や他者の立場の理解に基づいて、自己抑制する姿は、児童期のギャング・エイジでも同じことであろう。つまり、児童期の社会性の発達も、自己主張・実現と自己抑制行動の発達と見ることができる。

本研究では、児童期の社会性の発達を自己主張・実現と自己抑制行動の発達としてとらえる。そのような社会的行動を支える児童の内面の認知的・動機側面の特徴として、社会性達成への統制感、そのための手段保有感と手段の認識をとらえようとするものである。果たして児童の社会的行動の発達を、社会性CAMI尺度はどのように説明しているであろうか。そしてそこから児童の社会性の発達および自己制御行動の発達にとって、どのような手段の認識、保有感が達成への統制感と自己制御行動を支えているであろうか。

## 2. 方法と手続き

### 1) 被調査者

沖縄県都市部と農村部の小学校の4年生181人(男子97人、女子86人)、6年生184人(男子87人、女子97人)、合計365人が本研究の調査対象者である。

### 2) 調査尺度

①社会性CAMI尺度の作成：桜井(1983)の認知されたコンピテンス測定尺度の、SOCIAL尺度を社会的目標行動として設定し、Skinnerら(1988)のCAMI理論を基に、社会的目標達成への統制感4項目、手段保有感(努力、性格、運、教師)各4項目、計16項目、手段の認識(努力、性格、運、教師、未知の原因)各4項目、計20項目、総計40項目の質問紙を作成した。それぞれの質問に対して「よくあてはまる～あてはまらない」までの4件法で回答させた。

②自己制御行動尺度：柏木(1988)の幼児用自己行動制御尺度を用いたが、項目の一部を児童向けに修正し使用した。社会性CAMI尺度と同じく、4件法で回答させた。

上記2尺度にデモグラフィック要因と対人関係(友人数や遊びなど)項目を加え、「児童の社会性に関する調査票」を作成し、担任教諭の指導の下、調査を実施した。調査期間は1996年9月・10月で

ある。

### ③分析方法

社会性CAMI尺度の因子分析を実施し、達成への統制感、手段保有感、手段の認識の相互関係の確認を行った。その上で社会性CAMI尺度の因子得点(M=0,SD=1)を算出し、最初に性差、学年差を検討した。そして社会性CAMI尺度と自己制御行動との相関係数を算出し、次いで社会性CAMI尺度と「友人数」との関連を検討した。

## 3. 結果と考察

### 1) 社会性CAMI尺度の因子分析

社会性達成への統制感、その手段保有感、および手段の認識に関する40項目について、主因子法による因子分析を実施し、固有値1以上の6因子についてバリマックス回転によって単純構造を求めた。表1はその結果を示している。6因子で全分散の58.19%が説明されている。

第1因子は、項目4「もしわたしが新しい友だちと仲よくなれたとしたら、それは先生のおかげです」、項目14「もしわたしにたくさんの友だちができたとしたら、それは先生のおかげです」、という社会性達成における教師の手段保有感と、項目8「Aさんが新しい友だちとすぐ仲よくなれるのは、先生のおかげです」項目33「Aさんが、友だちに好かれるのは、先生のおかげです」という手段の認識「教師」が、ひとつにまとまる因子である。故にこの因子は社会性達成における「教師の認識と保有感」の因子であることが分かる。

第2因子は、項目7「Aさんが友だちに好かれるのは、たまたまAさんが運がいいからです」、項目19「Aさんがみんなとうまく係活動ができるのは、Aさんの運がいいからです」という運の認識と、項目16「わたしがみんなといっしょに係活動ができるのは、運がいいからです」、項目2「わたしが友だちに好かれたとしたら、それはもともと運がいいからです」という運の保有感の因子がひとつになる、社会性達成における「運の認識と保有感」の因子であることが分かる。この第1因子、第2因子はいずれも子どもの心の外側にある要因であることから、小学校高学年では、未

表1 社会性CAMI尺度の因子分析結果

項目番号	Fac. 1	Fac. 2	Fac. 3	Fac. 4	Fac. 5	Fac. 6	α係数
教師の認識と保有感	.792 .820 .843 .766 .821 .626 .725 .700						.928
運の認識と保有感		.564 .743 .631 .802 .739 .810 .742 .710					.899
努力・努力の正確の認識と保有感			-.664 -.391 -.540 -.441 -.626 -.612 -.743 -.709 -.661				.825
努力の統制感と保有感				.759 .812 .544 .718 .666 .623			.804
性格の保有感					-.618 -.496 -.837 -.512 -.795		.762
未知の原因						-.614 -.763 -.694 -.803	.799
因子負荷量2乗和	5.3076	5.1440	3.9861	3.3486	2.8597	2.6305	
寄与率 (%)	13.27	12.86	9.97	8.37	7.15	6.58	
累積寄与率 (%)	1.273	26.13	36.09	44.47	51.62	58.19	

だ自分の友だち関係を自分の内的要因（努力・性格など）で説明できない子が相対的に多いことを予測させている。

第3因子は、項目2「Aさんが新しい友だちと

すぐ仲よくなれたのは、Aさんがそのための努力をしたからです」、項目3「Aさんにたくさんの友だちがいるのは、Aさんの性格がいいからです」という手段の認識「努力」と「性格」の項目と、

項目5「もしわたしが友だちに好かれたとしたら、それはそうなるように努力したからです」、項目9「もしわたしにたくさんの友だちができたとしたら、それはそのための努力をしたからです」という努力の保有感の項目がすべて負の高い負荷を示している。つまり「努力・性格の認識と努力の保有感」の因子であると言えるが、それを否定する形でまとまっている。この因子に負の負荷を示した努力の保有感の2項目は、仮定法で質問しており、それ故、他の2項目の努力の保有感から分離した結果になっていると思われる。

第4因子は、項目1「わたしは、その気になればたくさんの友だちをつくることができます」、項目11「わたしはその気になれば新しい友だちとすぐ仲よくすることができます」という社会性達成への統制感と項目13「みんなで係活動をするとき、わたしはいろいろ努力して友だちと協力することができます」、項目36「わたしは新しい友だちと仲よくなれるように、努力することができます」という努力の保有感の項目がひとつにまとまっている。また「新しい友だち」に関連して、項目15「わたしは新しい友だちとすぐ仲よくなれる性格です」という性格の保有感の項目が加わっている。それ故、この因子を「努力の保有感と統制感」の因子と名づけることができる。つまり、友だちと協力し、仲よくできるという子どもの対人関係への自信は、主に本人の努力の意識に基づいていると推測できる。

第5因子は、項目12「わたしが友だちに好かれたとしたら、それはわたしが思いやりのある性格だからです」、項目28「わたしにたくさんの友だちができたとしたら、それはわたしの性格がいいからです」、項目38「わたしがみんなといっしょに係活動ができたとしたら、それはわたしの性格がいいからです」という項目がひとつにまとまり、「性格の保有感」の因子であることが分かる。ただこの因子には第3因子と同様にすべての項目が負の負荷を示し、社会性達成に関する「性格の保有感」が形成されにくいことを予測させている。

最後の第6因子は、項目10「Aさんがみんなとうまく係活動ができるのは、なぜかわかりません」、項目20「Aさんが友だちに好かれるのは、なぜかわかりません」、項目22「Aさんが新しい友だち

と仲よくなれたのは、なぜかわかりません」、項目32「Aさんに大勢友だちがいるのは、なぜかわかりません」という手段の認識「未知の原因」の項目がひとつにまとまっている。なお各因子の $\alpha$ 係数による信頼性は表1に示すように、 $\alpha = .762 \sim \alpha = .928$ の範囲にあり、十分信頼性の高い尺度になっている。

以上、社会性達成への統制感1カテゴリーとその達成への手段保有感4カテゴリー、およびその達成への手段の認識5カテゴリーの40項目を因子分析法で分析した結果、6因子で説明することができた。上記の結果から、教師の認識と保有感がひとつにまとまり、また運の認識と保有感もひとつにまとまっていた。そして未知の原因は独立した因子として抽出された。しかし、努力・性格の認識と保有感は、まとまった因子とはならなかった。それだけ「努力」や「性格」という要因は、子どもにとって抽象的な概念で、まだ十分に理解できる段階に発達していないということが指摘できるであろう。しかし、努力の保有感の一部は確実に社会性達成への統制感に結びついていた。

## 2) 社会性CAMI因子の性差及び学年差

一般に児童期の社会性の発達に関連して、ギャング・エイジの存在が指摘されている。ほぼ小学校3・4年生の頃がその時期に相当し、ギャング・エイジには仲間集団をつくり、その中で社会的発達に寄与する約束や規範の役割を理解し、それに基づいて社会的行動を獲得していくことが考えられる。また、子どもの社会性の発達は、性役割期待と結びつくことが予想される。一般に、社会は女兒には協調性や思いやりを期待し、男児には協調性や思いやりよりも強く、賢くという自我発達を期待するものである。それ故、先の社会性CAMIの各因子も基本的に性差、学年差の存在することが予測される。

先の社会性CAMIの6因子（「教師の認識と保有感」、「運の認識と保有感」、「努力・性格の認識と努力の保有感」、「努力の保有感と統制感」、「性格の保有感」、「未知の原因」）の性差、学年差を比較するために、6因子毎に性(2)×学年(2)の2元配置分散分析を実施した。それを示したのが表2である。

表2 社会性CAMIの因子の性差と学年差

因子名	F 値		下位検定		下位検定	
	性別	学年別	男子	女子	4年生	6年生
F 1. 教師の認識と保有感	n.s	48.85***	-.024	0.024	.392	> -.370
F 2. 運の認識と保有感	4.52*	3.62 <sup>+</sup>	.137	> -.137	.128	> -.121
F 3. 努力・性格の認識と 努力の保有感	3.64 <sup>+</sup>	3.48 <sup>+</sup>	.102	> -.137	-.102	< -.097
F 4. 努力の保有感と 統制感	8.58**	3.134 <sup>+</sup>	-.162	< -.137	.090	> -.085
F 5. 性格の保有感	n.s	n.s	-.044	.044	.002	-.002
F 6. 未知の原因	n.s	n.s	-.080	.057	-.061	0.57

+p <.1      \*p <.05      \*\*p <.01      \*\*\*p <.001

まず性差について検討する。因子2「運の認識と保有感」において性の主効果（ $F(1/280) = 4.52, p < .05$ ）が、因子3「努力・性格の認識と努力の保有感」で主効果の傾向（ $F(1/280) = 3.64, p < .10$ ）が、そして因子4「努力の保有感と統制感」において主効果（ $F(1/280) = 8.57, p < .01$ ）が認められた。男女差の下位検定（平均の差の検定）の結果、因子2では男児の得点が女児の得点より高く、因子3でも男児の得点が高いことが分かった。しかし因子4「努力の保有感と統制感」では、逆に男児より女児の得点が高いことが分かった。このような結果から、男児は友人関係のあり方を運で説明し、運に期待する傾向の高いことが予測できる。反対に、女児は自分の友人関係のあり方を自分の努力に期待する傾向が強いと言えよう。多分に先に指摘した、男女児への大人の性役割期待に沿った結果であると推測できる。

次に、社会性CAMIの6因子の学年差（4年生と6年生）について検討する。各因子のF値は、因子1「教師の認識と保有感」（ $F(1/280) = 48.84, p < .001$ ）、因子2「運の認識と保有感」（ $F(1/280) = 3.62, p < .10$ ）、因子3「努力・性格の認識と努力の保有感」（ $F(1/280) = 3.48, p < .10$ ）、および因子4「努力の保有感と統制感」（ $F(1/280) = 3.13, p < .10$ ）の4因子におい

て、主効果あるいは主効果の傾向が認められている。下位検定の結果、因子1「教師の認識と保有感」、因子2「運の認識と保有感」では、いずれも4年生の得点が高く、学年が幼いということから、自他の友人関係のあり方を教師、運という外的要因で説明し、期待していることが伺える。逆に、当然のことながら、因子3「努力・性格の認識と努力の保有感」の得点は、6年生において高いことが分かり、発達とともに努力や性格という要因で自他の友人関係のあり方を説明していく傾向があることが伺える。しかし努力や性格の役割の理解が、そのまま努力や性格の保有感には結びつかないようである。つまり、因子4「努力の保有感と統制感」は、6年生より4年生において得点の高いことを示している。友人関係を成立させる要因が努力や性格という抽象的側面に移行することで、かえって具体的な行動や努力を実行することが困難になるのか、あるいは他者や友人への同調や協調を阻む自我発達（独立、個別意識）の問題などが関与しているものと推測される。

また、因子5「性格の保有感」、因子6「未知の原因」に関しては、特に性差、学年差は認められなかった。

以上の結果から、女児に比較して男児の方が、自他の友人関係のあり方を教師や運という外的要因で説明していること、また6年生より4年生に

おいて同様の傾向にあることが分かる。しかし、努力を実行し、社会的目標達成への自信を持っているのは、女兒であり4年生であることが分かる。多分に高学年よりも低学年、また男児より女兒は他者や大人の期待を受けて、社会的行動が実行しやすいことが予測される。つまり、他者の気持ちや考えを理解し、それを受けて自己の社会的行動を調整(努力)していることを伺わせている。しかし、そのような傾向は第3節で検討するように決して一方的な他者や大人への従順ではないことを付け加えておきたい。

3. 社会性CAMIの因子と自己制御行動との関係

第1節において、社会性CAMIの40項目を因子分析で分析し、検討した結果、まとまりのある6つの因子が明らかにされ、因子2「運の認識と保有感」、因子3「努力・性格の認識と努力の保有感」、因子4「努力の保有感と統制感」において、性差が確認できた。また、因子1「教師の認識と保有感」、因子2「運の認識と保有感」、因子3「努力・性格の認識と努力の保有感」、因子4「努力の保有感と統制感」において、学年差が確認された。

ところで、ここで問題としている社会性CAMIは、対人的・社会的行動というよりは、むしろ社会的・対人的行動の認知的・動機的側面に関係

していると言える。それ故ここで明らかにした社会的対人的行動に関する社会性CAMIの認知的・動機的側面が、実際どれだけ社会的・対人的行動を予測できるかを検討する必要がある。本論では、児童の社会的・対人的行動として、柏木(1988)による自己制御行動(自己主張・実現と自己抑制)を取り上げ、両者の相互関係について検討し、考察する。

表3は、性・学年を込みにした社会性CAMIの各因子と自己主張・実現と自己抑制の各尺度との間で $p < .05$ で有意な相関係数を示している。表3の結果から、大きな特徴が伺える。つまり「努力の保有感と統制感」の得点が、自己主張・実現の全体と高い正の相関( $r = .549$ )を示し、かつ自己抑制の全体と正の相関( $r = .278$ )を示していることである。また、「努力・性格の認識と努力の保有感」が自己抑制の全体と負の相関( $r = -.245$ )を示していることである。しかし、他の社会性CAMIでは自己制御行動尺度と顕著な相関は見られていない。この結果から、「努力の保有感と統制感」の高い児童は、自己主張的行動をしっかりと行い、必要に応じて自己抑制的行動をも実行していることが伺える。がしかし、他者の努力や性格の役割の理解は、自己主張・実現と自己抑制行動に何ら寄与していないことになる。各尺度別に見ると、「拒否・強い自己主張」( $r = .426$ )、「遊びへの参加」( $r = .523$ )、「独自性・

表3 社会性CAMIの因子と自己制御行動の相関

自己制御\因子	FAC. 1	FAC. 2	FAC. 3	FAC. 4	FAC. 5	FAC. 6
自己主張 拒否・抗議 参加 独自性				.426***	-.189**	
			-.118*	.523***		
				.347***	-.128*	.150*
自己抑制 遅延可能 制止 耐性 根気	.130*		-.221***	.333***	-.162**	
			-.142*			.131*
		-.203***	-.328***	.355***	-.199***	.181**
自己主張 自己抑制		-.171**	-.246***	.550***	-.167**	
				.278***	-.146*	.179**

\* $p < .05$     \*\* $p < .01$     \*\*\* $p < .001$

能動性」( $r = .347$ ), と正の相関が見られ, かつ「遅延可能」( $r = .333$ ), 「フラストレーション耐性」( $r = .355$ ), 「持続的対処の根気」( $r = .218$ )とも正の相関が得られた。しかし, 他の社会性CAMIの因子は, 自己制御行動の各尺度と目立った相関は認められなかった。以上の結果から, 児童の自己制御行動—自己主張・実現と自己抑制—を支える認知的・動機づけの側面は, 「努力の保有感と統制感」であることが分かった。つまり, 児童における社会的目標を達成するための自らの「努力」とは, 自己主張・実現的行動であり, 同時に自己抑制的行動であるということになる。この結果は努力というものが自らの社会的目標を理解し, その目標に応じて自らの社会的行動を「調整」していく過程と深く結びついていることを予想させる。

#### 4. 友人数と社会性CAMIおよび自己制御行動の関連

これまで検討してきたように, 児童の社会性・社会的行動を支える認知的・動機的側面は「努力の保有感と統制感」であった。つまり, 社会的・対人的場面で他者と協調し仲良くするという社会的目標を理解し, それに基づいて「努力する」ということは, 必要に応じて自己主張・実現行動を遂行し, 同時に自己抑制を実行に移すということである。

ところで, 自己主張・実現を実行し, 同時に自己抑制をも実行するということは, 対人的交流の機会が多くなければできないことである。それ故, 「友達」の多い子とそうでない子には, 自己制御行動に差があることが予測される。そして, そのことが社会性CAMIの各因子にも差をもたらすと言えよう。

表4は, 自己制御行動の各尺度の得点を「友達」が多い子と, 少ない子で比較したものである。表4の結果から, 自己主張・実現と自己抑制の全体の得点の両者の差のあることを示している。(自己主張・実現,  $t = 8.50$ ,  $p < .001$ , 自己抑制,  $t = 3.96$ ,  $p < .001$ )。明らかに「友達」の多い子の方が, 対人交流の機会の多いことから, 自己主張・実現も, 自己抑制の得点も高いことが分かる。さらに, 各下位尺度毎に分析すると, 自己制御の「制止・従順」を除き, 自己主張・実現の「拒否・強い抗議」, 「遊びの参加」, 「独自性」, 自己抑制の「遅延可能」, 「フラストレーション耐性」, 「根気・持続的対処」のいずれにおいても「友達」の多い子の得点が高い。つまり, この結果から, 友達が多く, 対人的交流の機会の多い子の方が, 相手によって必要に応じて自己主張・実現行動と自己抑制行動を学習する機会が多く, 社会的行動の「調整」能力が発達していることになる。

では, それに対応して, 「友達」の多い子と少ない子では, 社会的CAMIに見る対人的行動の

表4 自己制御行動の「友人数」の差異

自己制御\因子	t 値	友人多い	友人少ない
拒否・抗議	6.08***	12.63	10.84
参加	7.80***	12.72	10.79
独自性	5.17***	10.59	9.27
遅延可能	n.s	11.74	11.65
制止	2.85***	13.72	13.00
耐性	3.87***	12.75	11.65
根気	4.19***	12.49	11.52
自己主張	8.50***	36.04	30.90
自己抑制	3.95***	51.00	48.05

\* $p < .05$       \*\* $p < .01$       \*\*\* $p < .001$



表5 社会性CAMIの因子の「友人数」の差異

因子名	t 値	友人多い	友人少ない
F 1. 教師の認識と保有感	n.s	-.032	.104
F 2. 運の認識と保有感	1.90*	-.103 <	.143
F 3. 努力・性格の認識と 努力の保有感	n.s	-.056	-.133
F 4. 努力の保有感と 統制感	7.94**	.318 >	-.577
F 5. 性格の保有感	n.s	-.044	.068
F 6. 未知の原因	n.s	-.080	-.105

+p <.1      \*p <.05      \*\*p <.01      \*\*\*p <.001

認知的・動機づけの側面はどのような差異を示すであろうか。

表5は、「友達」の多い子と少ない子の社会性CAMIの各因子の得点を比較したものである。表5の結果から、第2因子「運の認識と保有感」と、第4因子「努力の保有感と統制感」に両者の差があることが分かる。換言すれば、「友達」の少ない子は、「運の認識と保有感」の得点が高い（ $t=1.90$ ,  $p>.05$ ）傾向があり、逆に「努力の保有感と統制感」の得点の低い（ $t=7.94$ ,  $P<.001$ ）ことを示している。つまり、「友達」の多く、対人交流の機会の多い子は、明らかに他者と協力したり、仲良くできるようになるのは、「運次第」ではなく、自らの努力によるものと考え、社会性達成への自信を持っていることを示している。また、「性格の保有感」が「友達」の多い子を弁別しえないのも、興味深い結果である。未だ、子どもの「性格」の理解というのは、主観的で、客観的裏づけのないものであることを伺わせている。

#### 引用文献

- 柏木恵子 1988 幼早期における「自己」の発達  
東京大学出版会
- 唐沢真弓・東洋・宮下孝広 1993 学習意欲と原因帰属に関する国際比較研究—CAMIによる調査— 発達研究, 9, 87-98.
- 桜井茂男 1983 認知されたコンピテンス測定尺度（日本語版）の作成 教育心理学研究 31-3, 245-249.
- 島袋恒男・井上厚・嘉数朝子・前原武子 1995 沖縄県の児童の進路 発達と原因帰属に関する研究 琉球大学教育学部紀要, 46, 101-114.
- Skinner, E. R., Chapman, M. and Baltes, P. B. 1988 Control, means-ends, and agency beliefs: A new conceptualization and its measurement during childhood. *Journal of Personality and Social Psychology*. 54, 117-133.